

持 54

61

明治十九年十二月六日

1805

画工清種

大正
二年
十二月
六日

大正
二年
十二月
六日

大正
二年
十二月
六日

大正
二年
十二月
六日

大正
二年
十二月
六日



浮世又平警助剣

序	近松御坊門前の場
同	廣書院古書合の場
二幕目	長等山麓出立の場
三幕目	東海道藤澤宿の場
同	稻荷社内藤棚の場
四幕目	志賀山中櫻持の場
同	遠州横須賀堤の場
五幕目	八島榎浦段曳の場
六幕目	般若坂兜師内の場
七幕目	大津又平住家の場
同	八町暖庚申塚の場
大	栗屋町扇本屋の場
切	

佐々木左京大輔 將監下部借作 非人五郎藏 實は雷作 三保谷四郎國俊 盧無僧燕山 實は成俊	片岡我童
佐々木の御墨具付 又平女郎お筆 三保谷妻おきせ 書術の屋元お精 釣鐘屋のお辨	河原 藤太郎 中 村 善
犬上段八 又平弟波瀾市 太鼓置者典純 衆徒般若坊 岡部六助 小栗藤太郎 盧匠紋彌 實は藤太郎 悪七兵衛長清 盧無僧寶山 實は成清	中村鶴五郎 中村仲太郎 片岡丸童 中村芝次郎 藤 六 市川權十郎

長谷部雲谷 兜助明珍幸作 又平母お駒 田原桃彌 増山運平 矢ノ根五郎治 判人鬼六 景清女房衣笠 遊女おなみ	市川 壽美藏 片岡仁三郎 澤村宇十郎 中村 歌女之丞
將監娘書絹 雷作妹おきぬ 實は雷精 教経悪女花園姫 薩摩五郎 土佐の將監 登起の鬼 鶴押への驅太 吃の又平 疾父庄可重忠	中村 福助 中村 福助 中村 福助 中村 福助 中村 福助 中村 福助 中村 福助 中村 福助 中村 福助

○序幕 近松御坊門前の場

本舞たい上手瓦屋根の寺の大門練堀門のうちに四ツ目の紋の靴を張り廻り廻り近江の國近松御坊門前の体双盤にて幕明く新相中の仕出し門の内へ這入りしと爲ると幸突きの侍ひ叱り御願主様の參詣を知らぬかと是にて仕出し四人は橋がしりへ逃して這入る侍ひは「侍」御願主様にも殿さまのお越しをお待ち遊ばせ御様子「同侍」お越しの様子をお先供へと兩人ハ門の内へ這入る向ふより六角左京の大輪近習附き添ひ出て花道へ並ぶ門の内より横山半藏大野市平出迎ひせりふ有て「左京」日頃好める書工を集め今日の遊覽は予も楽しみに思ふぞよ「半藏」何は然れ我君には「市平」寺院へか入り「兩人」遊ばされ升ふと皆々舞たいへ來るばた〜に成り門の内より子役の猿書を持参して出て大上段八奴にて追かけ出る猿は左京の後へ隠れる段八下に居て「段八」猿の失禮の段ト平伏するシテあの者は「半」長谷部の小者段八とやら「市」猿を追かけお目障りト此内猿は艶書を左京に出すを讀み「左」予が手に有つて由なき物ゆゑ戻し遣はすと以後を吃度隠しむ橋名宛の者へ申

し聞けよ「段」恐れ入るト投げ返せし文を取り橋掛りへ這入る「近習」これなる猿は何者の手飼なるかと愛へ下女の「お船」私し主人の秘藏の猿この儘おゆるし下さる様ト下手へ來り説る「左」シテあの者は「半」將監光信方の「市」召仕ひにムリ升る「左」不禮は免す以後は斯様な事なき様「松」恐れ入升てムリ升る「半」何は格別わが君には先「皆々」入らせられ升ふト唄に成り左京先に家來皆々附て門の内へ這入る跡にて「松」ほんに其方がアノ文を拾ふて呉たので私も迷惑は遣れたれとお殿様のお傍へツカ〜出たらち手討に成る時は其方討りか私までが御主人様へ濟ドレお嬢様のお傍へ行き此お話しをト猿を連れて行くトする所へ「段」出て來り一寸待て貰ひたい「松」又しても無理を頼みを成さん〜たら長谷部様迄御身分に拘はる事が出来様ト立つを留て「段」おめへが野暮に投出す文を猿に渡され御前のお目によれた艶書お慈ひで戻つた粹なおおこれと主人の書絹さんへ届けて呉れト言ふと振切猿を連れてお松は門の内へ這入る跡を見送り「段」この文をお松めが兎や斯う断るは書絹には藤太郎といふ生ッ白けた

若衆めに思ひを掛けて居る様子ハハ能い手段が有らうな
者だト愛へ若衆抛擲出で(龍彌)夫程に困るなら已が居け
て遣う(段)誰かと思やアお主は龍彌同じ仲間の好み甲斐
ふ夫じゃア文の取次して(龍)イヤ執持は出来ねへが師匠
の娘に不義を仕掛る無法な弟子の雲谷様訴へ様と思ふか
ら文ハコッテへ請取るのだ(段)娘に渡せぬ此文を何で手
めへに渡す物か(龍)取つて見せるト双盤に成り兩人立廻
り有つて段ハ龍彌に組伏られる見附にて道具廻る

○本舞臺一面の平舞臺上の方大床の間高麗べりの薄べり
を敷詰め都て近松御坊廣書院の体古書物の掛物を掛け左京
守藏市平近習附添ひ此傍に奥方吳竹これに慶元附添ひ下
の方に空如上人住居音楽の鳴物にて道具留る(上人)大守
には好ませ給ふ程のつて薪工の名譽一々に御鑑定の段恐
れ入升てムリ升る(左)唐書を初め我朝諸流の筆意の丹情
法に叶ふて面白く(吳竹)取分て感心なは將監の娘龍彌が
認め外たる藤の花丹情の程左とと推察致し升る(左)何
體古書の其中ハ女子が筆意の土佐派の藤こりや天晴を著
ごむへ(慶元)女子にふしと書絹のの美事をお軸に(慶

皆々)ムリ升る(左)シテ將監に申付し徳宗皇帝の腕の一
軸未だ持參を致さぬか(半)先刻持參いたし升れと市お召
を相待か次に扣へ居り升る(左)早々持參致す(半)ハット
向ふ(遣入る)上)拙僧は祈念の支度と音楽に成り下手杉
戸の内へ遣入る向ふより將監一軸の箱を持半藏附て舞た
いへ来る(將監)君命に隨ひ室町殿より拜借いたせし一軸
持參いたしてムリ升る(左)おれなる床へ掛け皆にも拜見
させよト是より將監一軸の箱を床へかけ皆々に見せる世
に痛なる一軸ゆる門人の内早速寫させよト言付ける愛へ
向ふより長谷部雲谷掴み立の若衆上下にて跡より小栗藤
太郎若衆上下にて認めし箱を出す雲谷は霜牛塔の新圖藤
太郎は關寺の古書(將)藤太郎の繪を廣慶の一軸を寫せト
言附る所化出で御拜禮を遊ばせト是にて皆々杉戸の内へ
遣入る藤太郎獲り藤の軸をふるし箱へ納め書絹が藤の繪
を見て居る所へ下女のお松より袖娘の書絹を運て出て一
松)藤太郎さ何を御遊ばし升るト是にて(藤太郎)は
書絹が藤の繪を寫め書絹は關寺の古圖の繪合に藤たるを
喜びお箱は丁度よい書尾と(松)おめた様と書絹さよのさ

舞臺に成され度いどの願ひ(書絹)又上にも日頃おつ
しやつて物堅い藤太郎へ言ひ悪く思人能程にお松は下
手の杉戸の内へ遣入る(書)願ひ叶はぬ上はト死ふと言ふ
(藤)短慮を致されてはあ師匠様へ不孝ト留る所へ杉戸を
明けて(雲谷)不義者見付たト呼立るゆゑ將監半藏初め皆
々出来る(船)お二人様に限つては限らな事のムリ升せ
ぬは私一が證人(雲)藤者の證人役に立よか(船)おなたこ
とお娘さまへ附文を成され升した(雲)何で致さうト争ふ
所へ以前の檢出て雲谷へ飛付くを扇にて打する(將)コ
リヤ藤太郎夫へ出い不義の汚名は遠れねば娘は勘當との
元ハ破門致す(松)是と申すも私しがあ次ぎへ立て参り升
したが不調法(將)そちも同罪眼をくれた(雲)此上はあれ
なる藤の一軸寫す役目をト望むを(松)其お願ひ叶ひ升ま
いト杉戸の内より段八に繩を掛け引立出て書絹さまへ不
義を仕掛け長谷部様より送る絶書の使ひト文を出し將監
に渡す愛へ左近出て来り先刻娘が携へ出でし絶書との儘
に戻せしに娘を書し余人の不義を申し立る不届奴ト雲谷
を遣立す是にて半藏市平付の龍彌段八を引立向ふへ

遣入る愛へ吳竹慶元を引連れ出来り藤太郎の位をす左
京も今日の手柄に愛て罪を免そを(將)兩人共に免し置て
は御威光薄し藤太郎は長のお眼書絹は勘當附そし女諸
共腹を出し升せねば仕置の表が立ち升せぬト是にて吳竹
は上人へ願ひ有りと慶元を連れ杉戸へ遣入る將監は藤太
郎に言ひ付る藤の寫し某と替つて寫し差上ん汝らは早く
御前を立去りあろう(書)そんなら是が父上様は(松)モウ
お別れト藤太郎も立ちとする愛へ上人掛物を持出歸參の
時節を待てる、に肝要なる彌院の尊影新りて無事を計られ
よト饒別に授る藤太郎頂き書絹お松三人名殘を惜みな
がら向ふへ遣入る上人は娘の死骸を所化に抱かせ回向せ
んと皆々杉戸の内へ遣入る將監は一軸の箱を改め歸宅せ
んと立つ左京予が乗物に乗つて歸れと是にて(將)ハッ
ト平伏する木頭にて幕

○同返し觀音寺山麓の
場 平舞臺うしろ山又山の遠見松の立木同じく釣枝都て
觀音寺山麓の体山おろしにて暮明く狩人三人腰辨當めし
く得物を持ち捨せりふにて上手へ遣入る向ふより(段
八)モシあんまり不意の道放で用意の金子も無く(雲谷)

悔み甲斐のねへ俄浪人切り取りでも仕て路用を拵へ立退
く覺悟ト言ながら舞たいへ来る上手より竹の弓矢を持た
る狩人出て来るを兩人よて引納ぎ弓矢を取る狩人の驚き
橋掛りへ送て這入る跡にて「段」割籠の握り飯に火打道具
鏡目な物は少しも無い「雲」併し頭巾に山刀竹の弓矢が手
に入つたは切取りを爲る能道具「段」ドウカ今度には能旅人
でもト「雲」向ふを見て紋に幾への六角家の提灯師匠の師
宅弓矢を持て射留て呉ん「段」此山刀で供の奴らも切拂へ
ば「雲」段八ぬかるなト後ろの敷置へ忍ぶ愛へ中間箱提灯
を持乗物に付いて舞たいへかゝる段八冠冠山刀を抜き
提灯を切落す是にて「中間」ろふ籍者くト乗物をあき向
ふへ引返して這入る「將」乗物より出て邊りを伺ひ切て掛
る段八ト立廻り組伏る將監の胸腹へエイと矢撃して矢立
ドフとなる段八起返り切んとする人音する故飛のく雲谷
は乗物より一軸の箱を出し兩人上手へ逃入る向ふより雷
作手丸てろ燈を持藤太郎雷絹お松出て来り「雷」お供待に
に承まればは御勘當も成りし逆お花を致しければお任せ
成され升せ「藤」某し逆も思はざる暇の身「雷」御老年の父

上とうぞお花が叶ふなら「松」雷作とのにお任せ成されト
舞たいへ来り雷作將びんに爪づく「藤」コリヤ乗物が昇捨
めるは「雷」コリヤ旦那さま「雷」ナコ父上「藤」お師匠將び
ん様「雷」父上様イのう「松」旦那様イのう「雷」雷作でムり升
るお心遣にト皆々介抱する是にて「將」勘當なせし二人り
の者人目無きとは言ひ乍ら言葉おはして相濟ふかト皆々
面目なき仕打「雷」何者の仕業なるかお心遣りはムり升せ
ぬか「將」その曲者こそ雲谷ならん大切なる一軸乗物の内
を改め呉やれ「雷」誠は箱の見白ざるはト是にて「將」雷作
汝が計らいにて不幸もの、娘雷絹夫と、頼む藤太郎と一
軸の詮議を遂げお家の取置に成らぬ藤室町とのへ返上な
し夫を功に勘當の位跡參の願ひも叶ふ様汝も力を添へて
くりやれ「雷」何卒今端のお名残りに藤太郎様やお嬢さま
へお詞下し置れ升せ「將」土佐の家名を頼むとト大津に住
ゐる又年すら勘當免さぬ此年月「藤」ヌリヤ一軸を取得ぬ
内は「雷」御勘當は免り升ぬかト泣く「將」耳姦しい子遣と
も未だ此邊りに流浪ひあるかと言ふて呵るでは無い雷作
附てくれよト苦痛を堪へ世に便りない遣子の故から旅

飛とあるは此末苦勞も幾さんが翅かわして飛あるく其妻
鳥の身を任せ捨られぬ様斗らぬ與「雷」下郎が御守置は致
し升が旦那様には僅なお手紙「將」イヤ僅でも急所の矢疵
「藤」響へお花は叶はず共「雷」今わのお別れたつたト言
ト取置られ「將」最早兩眼見へされば何者なるか相分らぬ
「雷」夫おゆるしト皆々取附く「將」願より賜はる大小と金
子と奪ひ取られぬか今わの記念とらに遣はす「雷」それお
嬢さまト雷絹へ渡す「將」此二腰は雷引出○イヤヤ手引を
拵して長谷部が行衛二人りの者へ頼み置「藤」ヌリヤ兩人
に「雷」お記念まで「雷」旦那さま「將」ヲト兩人を突放し
手を合せるを木の頭皆々泣伏と三重にて幕
○二幕百藤藤宿茶見世の場 平舞たい在体の遠見被置張
りの出茶屋藤藤宿立席の体茶屋の亭主茶を運び百姓たは
ことを呑み「百姓」江の島の同者で急がしい事でムらう「茶
屋」此頃相の山を諷ふ親子づれ女房盛ふみれと顔に膏藥
だらけ「雷」おしし者だト話し錫鉞をかたけて上手へ這入
る向ふより段八雲介を運出て懐の鏡を出し茶代を遣るか
らとことどへ行つて来れト亭主を遣りおれも六角家の長谷

部といふ家中の中間巳の主人が遺恨のある主従大藏の立
場で見かけたから身ぐるみ刺で遺恨を晴し甘へ酒でも呑
ひ氣ト頼む「丁太」首尾よく遣りやア幾ら呉る「半次」欲徳
づくで頼まれやう「段」路用の金が百兩餘り連の娘は六
七の器量よく旅へ費ても二本や三本「半」酒を進めて言が
ゝるも古いから「丁」何んぞ喧嘩の「半」趣向はねへかト愛
へ「雲谷」イヤ其手立は幾らも有るト被置の蔭より出て六
角家にて室町殿より拜借の寶の一軸師匠を殺し夫を奪ひ
娘を説つけ立退く主従代官からの差圖と言ひ立衛道筋の
裏手へ引込み渠らと亡し寶の一軸はひ取る時は被置の金
は望み次第「半」シテ寶の一軸とは「雲」徳宗皇帝の鷹の一
軸「丁」盗んだ奴の其名前は「段」足取つれの主従四人「雲」
小栗藤太郎といふ青二オト雲介兩人呑込み向ふへ這入る
跡にて悪事を示し合せ然らば段八「段」若旦那ト兩人上手
へ這入る向ふより藤太郎雷絹雷作お船旅形りにて出て來
る跡より又半女房お筆頭へ膏藥を張りて袖乞の拵「三味
線」を持ち子供の福六の手を引出て雷作を呼かけ女子の身
ながらお力に成りたい願ひ是にて皆々床几へ掛る夫又平

なと取らんと爲るに心附き(藤)近松御坊の上人より授け
給ひし彌陀の尊影信心をせし甲斐あつて不思議に「命助
り」かマラ有難や母とやアト喜ぶ所へお筆上手より出
て来り(筆)おなたは藤太郎さまお別れ申て木鏡へ泊りお
米を買ひに出陣の途中お譲り申た鷹の書が目先へ飛で参
りしゆゑ宿の騒ぎにお跡を尋ねお戻し申に参りしと鷹の
書と出せば(藤)「藤」肌身へ附けし鷹の書とても有らざる
は此水中へ入ると恐れて抜出し御身の元へ戻りしか(筆)
見ればおなたも泉水へお落成されし御様子お松どのが此
死骸(藤)「藤」お松が此有様見るに附けても書絹が身のう
へ雷作も何れへ参りしや(筆)「筆」ドツア無難でお二人共も
「藤」居るを願ふに此掛物ト件ツの掛物を出すを半次め付
て(半)夫とコツキヤヘト掛ると一寸立廻つて引付ける(筆)
「筆」不思議なる其お掛地(藤)「いとも尋ねしと投げるを木の
頭、有難ひト拍子落

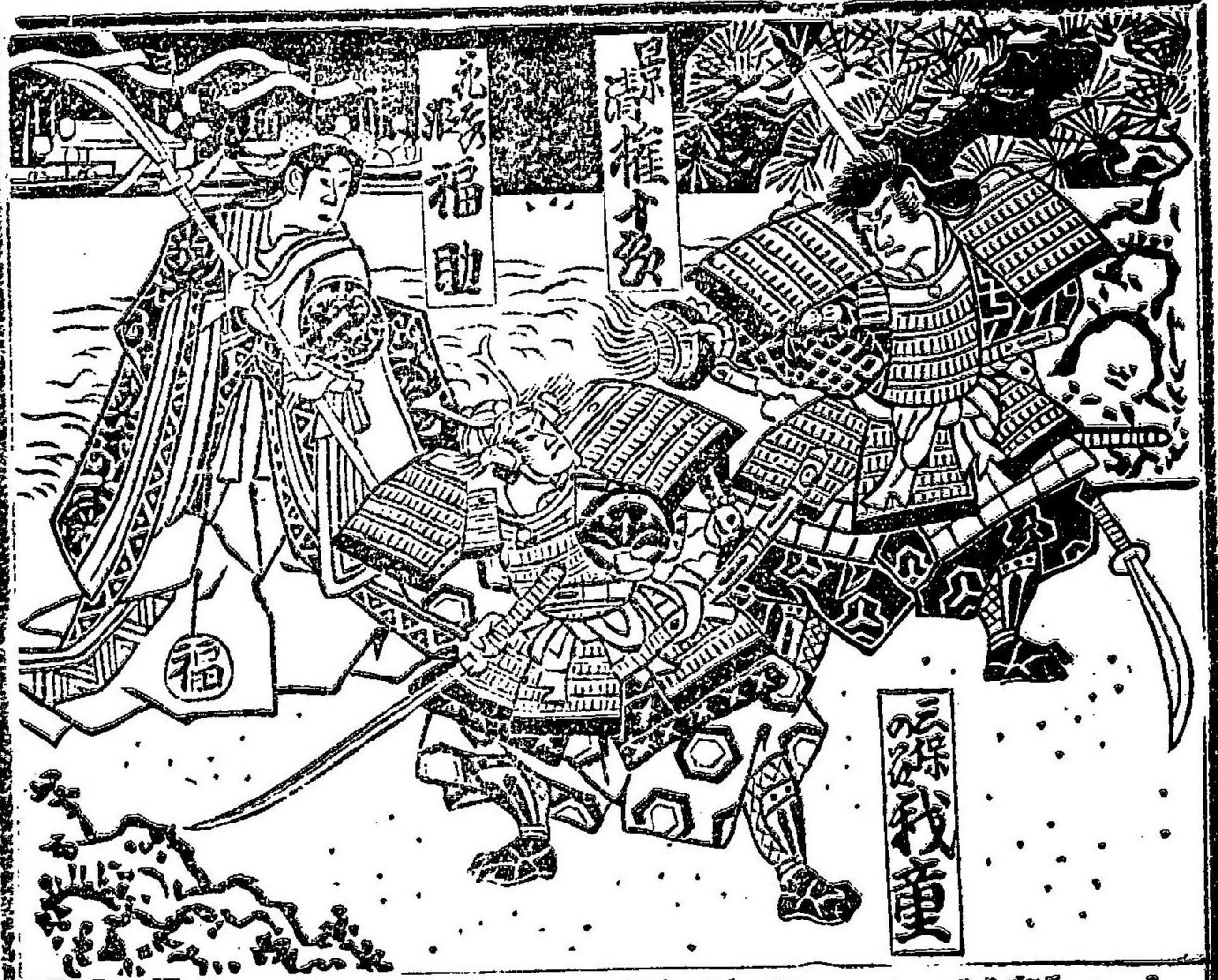
ら救さわの小屋に居る兄弟連の非人(△)妹といふは十六
七の娘盛り引渡やア大金よ成る代物だ(口)夫とヤアこれ
から押かけて兄だといふ非人めとよりのめして娘を渡は
よ(●)渡うといふヤア此先キよ淨瑠璃の渡ひが有るト淨瑠
璃の名題を讀み四人サア行ふかト橋掛りへ這入る知らせ
に清元連中の淨瑠璃に成り向ふより書絹振袖藤の花の枝
を持出て蝶と追ひ狂亂の所作よ成り能程に雷作の奴出て
来り行烈の振り有て双盤に成り向ふより鬼の念佛出て所
作有つて前幕の藤太郎若衆にて出る跡より序幕の抜出て
盃を持ち志賀山にて花魁の体宜しく有て(雷)「雷」鬼もあ
れる二人が有無事でお逢ひよ成りしうへは此から手に
手を取りかはし(藤)「イヤ」手前はお供先キ(書)おなた
はどつこへも遣ませぬ(鬼)「くわつくわつくわ」腹を立ち(猿)「ヤ
ヤツキヤ」(雷)「鬼はくわつくわに猿がキヤツキヤ何だかヤ
ツパリ分らない」(淨)「どやむる鬼を突のけて宿める方へぞ
急ぎ行ト皆々上手へ這入る跡にて鬼は酒を呑み愛(縁ぐ
るみの縁)一疋出て鬼を道廻す是にて鬼は上手の碑の麓へ

隠れ直に細竹の形り鳥羽繪に成り願取と取と鏡を押し
扱す宜しく有つて鏡を返つて向ふへ這入る淨瑠璃(筆)元
楳嶽の張物に成り「ド」にて道具替り上下敷だ、み非
人小屋都て遠州横須賀在小屋の体「ド」にて小屋の内
より(雷作)「非人にて出てヤツパリいつもの夢で有つたか
志賀の山路の花盛りへお供申して藤太郎さま死んだ猿ま
で無事で居たお悦びにてお嬢さまのお病氣も直り跡を尋
ねる御相談と喜んだらつどの間さめて見れば狐の内ト
小屋の内より(書)「コレ雷作何をここでいふて居るト雷作
も是を慰め人目に立つてハ成りませぬト内へ隠レドレ
粥を焚いて上げませしト焚火をして居る所へ幕明の非人
出て来り(○)コレ新米をの小屋の内へ隠してかく娘をお
らつち四人が貰ひてヘト是より非人とも無理に妹を呉れ
ろトいひ募り(雷)「コレヤも我慢がならぬわ(○)エ、
よぶけた事を(四人)おかしヤアがるなト立かゝるを見と
どに投られ花道へ逃ながら(○)土佐の將げんの娘と家來
に違へね(△)非人は似合はぬアイツの手を(口)雲谷
さんには知らせれば(●)約束通りのほうびの金(雷)「ナニ要

谷にこれにて四人は向ふへ逃て這入る今の奴らを引ッ
とら(●)敵の有所ト小屋の内より書絹出て(書)「隠しと有
ればおまも」所に(雷)「ヤアムりませ、行かける木釣鐘を
打つ折も折とてアロヤツ六ツ(書)「おなたが難目の時刻な
るかト兩人じつと這入るこの時上手の殿を押し分け前幕の雲
谷下手の敷より段八出て(雷)「わざく尋ねに行すとも雲
谷様は爰に居る(雷)「さういふ聲は(段)段八さまが案内し
ておつれ申した(雷)「ハッ、い、所へト書絹を後ろへ圍ひ失
おつたなアト身構へをす(段)「いくら手めへが騒いで
後ろで聞ヤア明(書)「時節も調度聞らしの果を身に知
る遠州の海にも近き落葉山命の枯野とあきらめて居残り
案出子の骨となれト雷作は仕込みの刀書絹は懐劍にて切
てか、り雲谷段八と立廻り雷作は難目よて危ふく段八書
絹を引付ける途にてハツと氣の狂ひし仕打(書)「アレ藤太
郎さまがお出成されたト是よて胸りする段八を探り寄て
雷作段八を殺る此はづみに土鍋を討返し焚火消る是より
忍び三重さぐり合のに成り向ふより吃の又平旅形り小田
原提灯をさげ出て舞たいへ来り段八に行寄り書絹の方へ

来て提らんにて顔を見(又平)「ま、お嬢さまだト物り
 雷作知らずにてうらなき打おとす又もとの暗闇に成る此
 時上手より藤太郎雷作を引付け又平は雷作を取(雲谷は段
 りに成り藤太郎雷作を引付け又平は雷作を取(雲谷は段
 八を押へ木の頭うしろの黒幕を切て落す遠州灘を見たる
 遠見これ一切ゆきの月を出と是にて(藤)「お嬢さまは雷作(雷
 お嬢さまは(雲)藤太郎だ逃ろ(雷)「書)「藤太郎さま
 ト歸らふとする(又)「ま、ムりませト無理に手を取り
 花道より向ふ(雲谷)段八を連れ東の揚幕へ這入る舞た
 いは雷作藤太郎のこり是を見送り幕
 ○中幕極の浦銀引の場 本舞たい上下岩の張物置原打よ
 せの波手すり向ふ一箇沖に兵船の遠見極の浦の体(頃淨
 る)「敷島の跡は都に通ひ路やト能ほどに向ふより花園
 ふり相姫の拵へ長刀を持ち出(花園)何國ぞと人にや問ん
 我行え便り浪に磯傳ひト舞たいへ来る跡より須股運平打
 て掛る(運平)御身は正しく平家の落人引くつて運まる
 るト申所なれ共美しいトしなだれ掛る(花)推参なる下
 郎ト立廻りに成り運平花園を引附る向ふより三保の谷

の形り兜を持出て来り運平を殺のけ花園を圍ふ(運)敵の
 味方か知らぬども妨げするナ(三保の谷)敵にもせよ味方
 にもせよ女を生捕り何の手柄(運)女なり共辨めたる(三
 保)運とわれは軍令に背きし汝陣所へ召つれ詮議しよ
 ふト運平せひなく覺へてあらふト一ツさんに向ふへ這入
 花園跡にて死ふトするを宥められ味方は増る情の詞(三
 保)又もや敵の来らぬ内ト落よといふ花園は名残りおし
 き思入にて東の花道へ這入る三保の谷跡を見送りせりふ
 有つて群れとぶ囀いはま打つ波より外に音もあしト兜を
 冠り行かける盧原をおし分け景清長刀をかい込み出て雨
 人ダンマリもやう宜しくあつて月出るや正しく汝は平
 家方かくいふ我の源氏の侍ひ三保ノ谷の四郎國俊(景清)
 我こそは平家方の侍ひ大將上總七兵衛景清なるはト跳へ
 の鳴物に成つて銀びきの見へになり去るにても首の強
 よ(三保)イヤ腕の強さよト兩人笑つて幕 同殿若坂鐘師
 の場 本舞たい常足の三重兜を并べし柵の書わり例の所
 門口鐘師幸作内の体幸作親仁の形り兜をきたへて居る子
 役時松丁雅三太と木太刀にて打ち合ひ事明く 時松三太



をマントに打つ幸作これを覆めて居る愛へ軍兵六助出
 て来りおかしみのせりふ有て急に桶皮の胴丸がわ入用明
 朝旅宿へ持参めされ(幸作)「お前様のお名は(六助)身
 共は岡部の六助ト夫より八島の軍咄しをな一世話で有つ
 たトかへる奥よりおきせ出て来り夫三保ノ谷との軍に出
 てモウ二年今に便りの無いといふト案じる所(運)運
 武者(藤五郎)拙者は御倉方の者然るべき具足があらば
 求めたい(幸)鎧の義なればお好み次第兜は桃形をほし形
 纏ひごん頭わり纏立ヲ物は前立わり立テ流義に依て忍ひ
 の緒にも結びやうも様(三保)谷結びと申のも(三)その
 三保ノ谷ハ申さぬ事武士の家には大禁物(幸)「どうや又か
 せでムリ升る(三)八島の軍は不覺を取逃さる一悪病者
 故三保ノ谷の名を嫌ひ申(幸)三保ノ谷殿が戦場で不覺
 取らされたとは(三)平家の侍ひ景清といふ武士に出合ひ
 赤恥かいて逃げたト恥しめかして直ぐ欠落れぬ主用
 繁多ゆゑ具足は明日見に参らんと纏る床の淨るり成り
 おきせは押入の脇差を出し欠出す幸作と三保ノ谷は
 どの勇士とへ不覺をとらせを景清女の方で行ふかと宥り

時松をつれ伺ふ籠上るト景清幸作は下手に居て八島の暇
 みに任せ此場にて「浄ろり」語り聞んと座を掃へトこへ
 (一般)景清かくこト切てかゝるを合手に物語り有て「浄」標
 首つめは兩眼飛出しウンとも言を死てんけりト般若坊
 は落入る(景)今にも南都へ忍ぶには幸ひの衆徒の形ト衣
 笠子役と連出る親子揃ふて「衣」何めのお話しト四人興へ
 這入る愛へおきせ時松を連悔しがる時松景清を切らんと
 いふを幸作とめ小七郎を切れとおきせが持し脇差を渡
 す時松勇んで興へ行小七郎と切合ひ手を負ふおきせ欠寄
 るを「三」出て止め流石は平家の六代君と及引の刀にて向
 はせ死せし悴はと長巻りト頼朝公の内意と本心を明しお
 きせ幸作死骸を抱き興へ這入ト「三」ヤア〜景清心を改
 め鎌倉殿へ隨身せよト興へ行景清六代を抱き出る愛へ
 (五)注進にて出宜しく有て六代を受取向ふへ這入る愛へ
 衣笠自害して六代君の義理と報へばお主の無念を晴して
 ト「景長刀にて首を切り向ふへ行き」三呼留になり八島の
 浦の戦ひより「景」別れ〜の鉢鍔ト「兩人」切結ぶ所へ幸

時松をつれ伺ふ籠上るト景清幸作は下手に居て八島の暇
 みに任せ此場にて「浄ろり」語り聞んと座を掃へトこへ
 (一般)景清かくこト切てかゝるを合手に物語り有て「浄」標
 首つめは兩眼飛出しウンとも言を死てんけりト般若坊
 は落入る(景)今にも南都へ忍ぶには幸ひの衆徒の形ト衣
 笠子役と連出る親子揃ふて「衣」何めのお話しト四人興へ
 這入る愛へおきせ時松を連悔しがる時松景清を切らんと
 いふを幸作とめ小七郎を切れとおきせが持し脇差を渡
 す時松勇んで興へ行小七郎と切合ひ手を負ふおきせ欠寄
 るを「三」出て止め流石は平家の六代君と及引の刀にて向
 はせ死せし悴はと長巻りト頼朝公の内意と本心を明しお
 きせ幸作死骸を抱き興へ這入ト「三」ヤア〜景清心を改
 め鎌倉殿へ隨身せよト興へ行景清六代を抱き出る愛へ
 (五)注進にて出宜しく有て六代を受取向ふへ這入る愛へ
 衣笠自害して六代君の義理と報へばお主の無念を晴して
 ト「景長刀にて首を切り向ふへ行き」三呼留になり八島の
 浦の戦ひより「景」別れ〜の鉢鍔ト「兩人」切結ぶ所へ幸

時松をつれ伺ふ籠上るト景清幸作は下手に居て八島の暇
 みに任せ此場にて「浄ろり」語り聞んと座を掃へトこへ
 (一般)景清かくこト切てかゝるを合手に物語り有て「浄」標
 首つめは兩眼飛出しウンとも言を死てんけりト般若坊
 は落入る(景)今にも南都へ忍ぶには幸ひの衆徒の形ト衣
 笠子役と連出る親子揃ふて「衣」何めのお話しト四人興へ
 這入る愛へおきせ時松を連悔しがる時松景清を切らんと
 いふを幸作とめ小七郎を切れとおきせが持し脇差を渡
 す時松勇んで興へ行小七郎と切合ひ手を負ふおきせ欠寄
 るを「三」出て止め流石は平家の六代君と及引の刀にて向
 はせ死せし悴はと長巻りト頼朝公の内意と本心を明しお
 きせ幸作死骸を抱き興へ這入ト「三」ヤア〜景清心を改
 め鎌倉殿へ隨身せよト興へ行景清六代を抱き出る愛へ
 (五)注進にて出宜しく有て六代を受取向ふへ這入る愛へ
 衣笠自害して六代君の義理と報へばお主の無念を晴して
 ト「景長刀にて首を切り向ふへ行き」三呼留になり八島の
 浦の戦ひより「景」別れ〜の鉢鍔ト「兩人」切結ぶ所へ幸

時松をつれ伺ふ籠上るト景清幸作は下手に居て八島の暇
 みに任せ此場にて「浄ろり」語り聞んと座を掃へトこへ
 (一般)景清かくこト切てかゝるを合手に物語り有て「浄」標
 首つめは兩眼飛出しウンとも言を死てんけりト般若坊
 は落入る(景)今にも南都へ忍ぶには幸ひの衆徒の形ト衣
 笠子役と連出る親子揃ふて「衣」何めのお話しト四人興へ
 這入る愛へおきせ時松を連悔しがる時松景清を切らんと
 いふを幸作とめ小七郎を切れとおきせが持し脇差を渡
 す時松勇んで興へ行小七郎と切合ひ手を負ふおきせ欠寄
 るを「三」出て止め流石は平家の六代君と及引の刀にて向
 はせ死せし悴はと長巻りト頼朝公の内意と本心を明しお
 きせ幸作死骸を抱き興へ這入ト「三」ヤア〜景清心を改
 め鎌倉殿へ隨身せよト興へ行景清六代を抱き出る愛へ
 (五)注進にて出宜しく有て六代を受取向ふへ這入る愛へ
 衣笠自害して六代君の義理と報へばお主の無念を晴して
 ト「景長刀にて首を切り向ふへ行き」三呼留になり八島の
 浦の戦ひより「景」別れ〜の鉢鍔ト「兩人」切結ぶ所へ幸

此内財布を落す段八止めを差し金を捜し愛へ忍び廻わり
矢、根五郎前リ召捕れト段八逃ると捕手も追かけ還入
る此跡へ又平考へ乍来り財布に爪づき見て「又」エ、コリ
ヤ金ト口を押へると道具替りにて元の又平の内へ廻るが
鬼六は又平を隠して在ると母お願福六の留るも辨はずお
筆を番絹の替りに連て行くト引立て行く所へ又平隠り金
を出して典純へ渡すと請取今夜は釣鐘屋で大忌遊びト鬼
六ト連立向ふへ還入る母は金を索じると筆は戸棚を明け
番絹を出し今宵は目出度三味せん彈てト母の喜び皆々と
奥へ還り又平番を書て居る島部山の唄に成り「藤」又平と
の久々に逢ひ申すト又平胸にお筆を呼ひ番絹も来りみ
んな勘ふてト喜ぶ又平筆に袖を引て指で番絹の位
をすする「藤」コリヤ番絹との御亡父へお他とト番絹父の位
牌へ願ひ勘當を免れ又平夫婦喜んで居る所へ石山拾枝の
手紙又平とのが書出に成り渡瀬市とのト咄して歸られて
間もなく渡瀬市とのが行方知れず五十兩トいふ金が亡て
愛の内へ来はせぬかと出かけて来た庚申年で渡瀬市

どのが切られて居る盗んだ金を盗まれたか知らせに來た
ト出て行く跡にて皆々驚く藤太郎は様子を見留る又平と
突のけ向ふへ還入番絹もお筆の留るを振切り跡を進行上
手より福六出でおばアさんが願をつき苦んでト又平驚
き寄るを「願」嫁の貞節おのれの孝行通れと思ひしに不便
や弟に盜とをさせ途中におめて殺すとト悔み乍落入る
お筆は又平が母の刃を取て死なんとするれば私しも此福六
を殺して死す形見に残る妻をト跡へ残して「又」ア、
あの手水鉢がセ、石塔じやト手水鉢へ番を書く此石の
向ふへ振る夫婦驚き見る所へ五郎次段八を縛り繩取に引
せ又平に素心させト引するも藤太郎番絹雷作出で
「藤」死ぬに及ばぬ「番」又平とのを勘當させも雲谷が備
筆との白状「藤」又一軸も願し持柴屋町におる事通知れた
る上は手配りをして敵討「藤」近松御坊の上人より授る福
陀の尊影にて老母の回向ト器物を出し老母へおさす死骸
より人魂出て又平の流るへ消る是にて血を吐き「又」女房
仲藤太郎とコリヤ入道に口が利かれる「番」我子を守る
親の慈悲「番」ア、手水鉢へ番を書き「又」後ろへ扱たは人

の「一心雷」何書た番が扱たとは「皆々」通れ名筆「淨」雲れば
世々にト三重に成り幕
○大詰柴屋町藤太郎の場 正面中障子の襖形欄間を
かろし釣鐘屋二階の体揚女郎を合手ト「典純」愚老も運が
向いて来たか薬箱は取れぬト高根湯を盛つた氣違ひが
直り五十兩手に入れば番分女郎を買ひ酒も呑れるト悦ぶ
所へ合方お浪来りト此頃五十兩お客に貰つたお金を主
人へ返したればあなた所へ行れ升「典」馬鹿な奴もある
者ト廊下の外に伺ひ居たる「雲谷」身共は馬鹿ものお浪よ
くも訛したトお浪遊るを捕へ夕櫛な問夫がある共知らぬ
身ゆけが仕たいとサから渡して遣し五十兩訛られては勘
辨ならぬ主人の前へ一所に行金を返かそちらの問夫と思
ひ切り身共の妻に成るといふ起請を書か「浪」五十兩とい
ふお金を貰ひましたに違ひはないが夫婦約束したのはお
世事「雲」モウ辨辨がトお浪を打「浪」戀しい夫の見る前で
殺されるは本望「典」其金は愚老が返すト五十兩包を出す
を懐中し「雲」問夫とのシッポリおしげり成さしト下手へ
這入る「典」其心根が知れた上はト奥にてお浪さんトト
呼ぶ「浪」エ、おれつたいト出行跡にて「典」嫌つたお浪が
女房に成るとは今年に醫者の豊年と見ゆるト廻る下座鋪
に成り橋掛りより若い者案内して藤太郎雷作を連れ出て

女房に逢ふといひお辨を呼び「藤」高島家の浪人長谷部雲
谷はせり、平と名乗り入込し師匠を書し出奔なし春ひ
し一軸取得されれば敵討と其かひなし事なく一軸取返
す工風をト頼む「辨」足田女の後智恵もトウカ工風をト請
合ひ還入る「雷」番絹様と又平殿へお知せ申さん「藤」いか
にも待し本望も「雷」目さすは堅き石山のキヤツは粟津と
尋ね「藤」福田の長橋長く共早る矢走せを堪忍び「雷」
松にかひある唐崎や「藤」通れ堅田とつき留し「雷」有所を
三井のかねてより「藤」相圖は比良の雲ならで「雷」今宵ぞ
つもる已雲谷「藤」コレト留る此道具お浪の部屋へ廻る判
人鬼六酒を呑で居る「お浪」鬼六さんの知せで長谷川さ
んといひ合せ「雲」金を取つたら本音を出し嫌な奴なら振
付て來ぬ様にするが能「鬼六」所が愛内の主のかみさんが
家業に似合ぬへ馬鹿正直客を訛て大金でも巻上た事を
升と返して遣れといひ升職醫者だけふり出しつけが能
ムイ升併し上ヶ干ツを喰つて典純はトナ面を仕て居る
か「浪」顔が木魚に似て居るから蒲團の上へは似合て居升
「雲」イヤ已惚たやつだト愛へ襖を明けて「典」といつもこ
いつも太い奴だ「浪」冥利の悪イお金だから訛して貰つた
「典」訛またとは太い奴ら街りが居るららみんな来いト
ト是より女房若イ者出て留めるを向ンでも金を出せト登

金を落して気が違つた。若し者無理に下へ連れ行く
愛へお辨出て来りお客様にお咄しがムイ升めらあ涙を初
めみんを下々へト是にて皆く下手へ這入る(雲)入拂ひ
を仕て咄といふは(辨)只今當所の會所から私しを呼びに
参り出まして見ればおれたのお調へ西國方の御入はせ
川雲平様といふ借な客と言ひ上ケーに其名は偽りはせ
部雲谷といふ者師匠を殺し實を奪ひし者ゆゑ明朝迄歸さ
ぬやうにト申付つて歸りましたがお伺ひのき請へお客様を
細付にして出し升は藤原が惡ふムり升今宵の内はコッソ
リトお逃し申心得でお咄し申に参りト聞いて驚き(雲)
子細有て師匠を殺し立退きしがツイ面白さよウカク長
居御身が情けの遠引さにて知らせしハ過分の至り揚代金
の滞りや禮と致して五十兩是とあん身に遣わせば早く逃
がして下されい(辨)何れへお逃げ成されても先立ッ物は
金子ゆへお貸し申て置升ふが其替りに内々に會所で聞
一品物を借に私しがお預りわたの御運の開きし節五十
兩にて差上れば私しも安心(雲)逃れの必附詮議さびしき
品ゆゑに實は實の持ぐされ開いて見れば目の潰れる曼だ
らゆゑ此ごとくト封印せし包を出す(辨)女子の事ゆゑ分
りませねと大切にト請取り連子を毀してお逃ケ成さいま
一明朝に成り私しの言ひゆけに成り升る(雲)何から何迄

逃げないし連子をまたぎ上手へ這入る愛へお浪出て長谷
川さんハト連子の方を見るをお辨支へる騒ぎ頃にて黒城
の外トへ廻り雲谷を真中に(書網)父の敵のはせせ雲谷
〔又平〕サア尋常(兩人)勝負(雲)吃りと思ひし又平
をいつの間にかやら五音が廻り待伏せしてあつたよかト上
手より藤太郎雷作出て来たり(藤)思ひの儘に欺きて外ト
へ引き出す上からは(雷)これにて余人の妨げを本望と
けて本地へ御歸参(雲)イヤ本望とは事あかや身共を耐
つても肝心の鷹の一軸手に入らねば本地へ歸参は叶はぬ
事だト此時正面城の内の二階よりお辨鷹の一軸を開き顔
を出し(辨)皆さん是にお實は借に取れ得てムり升る(藤)
スリヤ一軸も(四人)手に入りたか(雲)扱は此屋の女房に
うま〜一ツばい乗せられし片ッばしから返り討ちだ
〔四人〕何をこしやくなト是より鳴物になり立ち廻り有つ
て皆々にて雲谷を切倒し(藤)眞の敵(雷)父の仇(雷)主人
の敵(又)師匠の仇(四人)思ひ知つたか(又)本望達して
皆々喜び打出し

明治十九年十一月一日御届 (定價七錢)

編輯兼出版人 日本橋區藥研堀町十八番地 深谷龜太郎

海み甲斐のねへ俄浪人切り取りでも仕て路用を帯へ立退
く覺悟ト言ながら舞たいへ来る上手より竹の弓矢を持た
る狩人出て来るを兩人よて引射ぎ弓矢を取る狩人の驚き
橋掛りへ逃て道入る跡まで一段(割籠の通り飯に火打道具
鏡目な物は少しも無い(雲)併し頭巾に山刀竹の弓矢が手
に入つたは切取りを爲る能道具(段)トウカ今度には能旅人
でもト(雲)向ふを見て紋に登への六角家の提灯師匠の跡
宅弓矢を持て射留て吳ん(段)此山刀で供の奴らも切拂へ
ば(雲)段八ぬかるなト後ろの敷置へ忍ぶ愛へ中間箱提灯
を騎乗特に付いて舞たいへか下る段八(提灯)山刀を扱
提灯を切落す是にて(中間)るふ(乗物)をみる向
ふへ引返して道入る(將)乗物より出て邊りを同ひ切て掛
る段八ト立廻り組伏る時監の腹腹へエイと夫單して矢立
ドツとなる段八起返り切んとする人音する故乗のく雲谷
は乗物より一軸の箱を出し兩人上手へ逃入る向ふより雷
作手丸てう燈を持藤太郎斎絹か松出て來り(雷)お供待に
て承まはれば御前當り成りし逆は佐を殺し升ればお任せ
成され升せ(藤)葉し逆は思はざる腹の身(雷)御老年の父

上どうぞお佐が叶ふなら(藤)雷作とのにお任せ成されト
舞たいへ來り雷作將げんに爪づく(藤)コリヤ乗物が昇捨
めるは(雷)コリヤ旦那(雷)書(ナニ)父上(藤)お師匠將げ
ん横(雷)父上様いのう(藤)旦那様いのう(雷)雷作でムら升
るお心儀にト皆々介抱する是にて(將)雷作をせし二人り
の者人目無きとは言ひ乍ら言葉おはして相濟ふのト皆々
面目(雷)仕打(雷)何者の仕業なるかお心當りはムら升せ
ぬか(將)その曲者こそ雲谷ならん大切なる一軸乗物の内
を改め呉やれ(雷)敵で箱の見はるはト是にて(將)雷作
汝が計らひにて不幸もの、娘斎絹夫と、頼む藤太郎と一
軸の詮議を遂げき家の取置に成らぬ(藤)室町でのへ返上な
し夫を功に勘當の佐藤參の願ひも叶ふ様汝も力を添へて
くりやれ(雷)何卒今端のお名残りに藤太郎様や(藤)お
へお詞下し置れ升せ(將)土佐の家名を頼むはト大伴に住
ある又平する(藤)雷作免らぬ此年月(藤)コリヤ一軸を取得ぬ
内は(藤)御前當り免り升ぬかト泣く(將)毎夜い子産で
も未だ此邊りに流涙ひあるかと言ふて呵るでは無い雷作
聞てこれト(藤)苦痛を堪へ世に覆りない産子の故から

飛どめる此未苦勞も愛さんか翅かおして飛あるく其妻
鳥の身を任せ捨られぬ様斗らぬ(雷)下郎が御守國は致
し升が旦那様には値はる手(將)一々値でも急所の矢疵
藤(雷)お佐は叶は共(藤)今わのお別れたつたト言
ト取置られ(將)最早雨眼見へおれば何者なるの相分らぬ
雷(天)おぬるしト皆々取附く(將)眼より賜はる大小と金
子と奪ひ取られぬか今わの記念とちには遣はす(雷)それお
使はさす(將)情へ渡す(將)此二腰は笠引出○イヤサ手引を
爲して長谷師が行衛二人りの者へ頼み置(藤)スリヤ兩人
に(將)お記念まで(雷)旦那様(藤)ト兩人を交放し
手を合せるを木の頭皆々泣伏を三重にて幕
○二幕(藤)海茶見世の場 平舞たい在体の遠見長巻張
りの出立屋簾簾宿立の体茶屋の草生茶を運び百姓はば
こそ呑み(百姓)江の島の向者で急がしい事でもら(茶
屋)此頂相の山と強(藤)親子つれ女房望りまると顔に膏藥
だらけ(百姓)おしし者だト話(藤)細針をかたげて上手へ道入
る向ふより段八(雷)介を運出で銀の鏡を出し茶代を遣るか
ら(藤)お入行つて來れト亭主を遣りまれば六角家の長谷

部といふ家中の中間巳の主人が遺恨のある主従大破の立
場で見かけたから身くもみ刺で遺恨を晴し甘へ酒でも呑
ひ氣ト頼む(丁)太(首尾よく遣りやマ後ら吳ん(半次)後梅
づくで頼まれや(段)路用の金が百両餘り連の娘は六
七の器置よく旅へ費ても二本や三本(半)涙を進めて言が
しるも古じから(丁)何んぞ喧嘩の一半趣向はねへかト愛
ハ(雲谷)イヤ其手立は幾らも有るト技賣の蔭より出て六
角家にて室町殿より拜借の寶の一軸師匠を殺し夫を奪ひ
娘を説つけ立退く主従代官からの差圖と言ひ立街道筋の
裏手へ引込み頼らぬ亡し寶の一軸は取るときは褒美の金
は(藤)次郎(半)シテ寶の一軸と(雷)御宗皇帝の賜の一
軸(丁)盗んだ奴の其名前に(段)足取つれの主従四人(藤)一
小栗藤太郎といふ青(一)オト遺介南へ香込み向ふへ道入る
跡にて悪事を示し合せ然らば段八(段)若旦那ト兩人上手
へ道入る向ふより藤太郎斎絹雷作お騎旅形りにて出て來
る跡より又女房を筆頭へ膏藥を張りて袖の拵へ三味
線を持ち子供福六の手を引出て雷作を呼かけ女子の身
ながらお力に成りたい願ひ是にて皆々床几へ掛る夫又平

土佐の苗字を抜款へ認めし連御勘當身に懸りの無い信平
ながら口不調法故ツ御破門思ひも奇らぬお師匠様の御
勘當を尋ね粉失の一軸も有所を探り其手柄にて御勘當
の念論と思ひ立ど一人の母が長の煩ひ夫が居ねば暮しも
立寄昔おはれた三味線の米熟も時に相の山お跡を暮し此
宿中で見の隠れにお守も申すでふりすすればお供の願ひ
「藤」大津方して遙々と力を添ふる心慮ト皆々感心なと「雷」
逆もの事に又平との勘當をお免しを「藤」聞すまぬと言
ふ譯は敵も實の有るも知れ御倉へ下る道中右ゆゑ早く國
へ歸り又平とのにも喜ばせ老母にも安心させと「雷」先年
夫が室町のお結にて拜見せし藤の一軸が名代に私しを
旅へ立せる前夜より認めし藤の雷は一軸を詮議の手鑑ト
白紙へ書し藤の雷を出す是を藤太郎見て感心なし所望し
て金を社に還る是にてお筆の福六を連れ皆々一體と言ひ
向ふへ還入る「雷」テモ頼母しいア、親子「藤」破門とされ
一又平の妻子用事は無しと断りしが丹精こめし藤の雷に
赤心は分りたり爰へ雲介丁太半次大勢引連れ出て酒手を
ねたり扶持に放れた小豆藤太郎さりと酒手を「雷」出

して仕まへ「雷」扱は誰ぞに頼まれたる「丁」お、代官に頼
まれたト皆々打て掛るを藤太郎雷作さへ「丁」下へ道つて
道入る跡にて雷網を連れお船荷を持ち逃しようとする所へ
雲谷段八出て来り双方より圍む「雷」思ひがけない長谷部
雲谷「船」入足ともを語らひしは「雷」おのれが仕業で「両
人」ありよなア「雷」名乗合せて「両人」勝負しや「雷」時
に迷ふ小雀と鷹が視つて一ト晩は羽がひの下の暖め鳥自
由に成つて居りやアよしナヨツナヨト囀る皆し又向ひす
りやア一トむしり餌食に仕にやアならねト立廻りにな
り雷網懐剣にて切てかゝるを雲谷打あとし雷網を引付る
爰へ雷作出て来り入亂れの立廻り引張りの見得まで廻る
○平舞たい朱の玉垣の石垣一面の藤棚すを通り池を見せ
都て藤海宿真手稻荷社内の休床の淨瑠璃に成り「淨」名さ
へ紫の藤棚に移る社内の池近く深入り爲せし藤太郎爰
へ丁太半次雲介を合手に藤太郎出て来りなア取るにも足
らぬ蚊踏始めら初捨くれん「丁」半次ぬかるナ「半」大丈夫
だト神樂になり皆々を追込みホット思入「藤」不知案内な
る此裏道雷作は如何せしかト爰へ雲介大勢竹鎗を持出て

立廻り此内丁太竹鎗にて足を突く是にて藤太郎「丁」成
る「雷」情用捨る荒きこの所様はぬ波多うも其儘息は絶え
けり「丁」死骸が有るやア面明々後ろの池へ投げ込め「雷」
手取足取り泉水へ打込む死骸の體中よりト池の中より藤
出て飛去る「丁」咄しに聞た藤の一軸「半」金目な代物道か
けるト雲介皆々道行く爰へ段八割がけの荷を持還るを
秘道かけ出て「藤」女ながら大事の荷物「段」おれおれ
此裏手へ我をウマウマ連込む手立自由に成らぬと命が
ねへど「藤」たとへ命を捨る共おのれの手込めに成るべき
やト立廻りに成り切りお松を切り留めを差す上手より雲
介出て来り「雷」サ、段八夫に居たか荷物を取つたは出か
す「段」何が包んでふり升か「淨」紐を解々割がけの中
かし明れば光明の光りと俱に掛表具藤の相へ飛去ればト
荷の中より彌陀の表具差がねにて藤棚へ掛る兩人は心付
かず「段」チツとも早く若旦那「雲」段八ぬかるなと荷物と
抱へ向ふへ還入る跡へ雷作雷網を連出て来りお松の死骸
よ不づき差を見付け胸りして介抱させと「雷」答への無も
尤も留めが差してふり升「雷」そんなら段八に無慮の切替

されたるか、死骸を取付き敷く所へ半次出て来り藤が飛
去る様子では咄しに聞た一軸を持つ居るに違ひねト池
へ飛込めと爲る「雷」待て人足何ゆへ池へ飛入るのだ「半」
さう言ふは先きの奴藤太郎といふ侍ひも池へ打込み殺
したから已も還入つて死で仕まへ「雷」ナ、藤太郎さまが
此池へ還入つてお果成されたとなハツツ泣伏す此内半次
雷作に細附くと隙がへす是にてバツツ倒れる雷作は雷
網を介抱する内「雷」サ、ハ、ハ、ハ、笑ひ出して狂氣の体
池の傍の藤の枝を折り「雷」サ、ハ、ハ、藤太郎さまの雷網
んが直つた御一所に先きの泊りへ「淨」姿も亂れ藤々枝を
抱しきく狂亂になり向ふへ還入雷作もエ、情ないト
追かけて向ふへ還入る跡へ丁太出来り半次に爪づく是に
て起上れば「丁」コレ手を貸せ大金に成る一軸を持つ居る
今の死骸引上げるから頼むのだ「半」夫は何より「淨」そんな
くと飛入れば星影うつる藤棚へ光明輝く彌陀の尊影忍
ち池へおるこちと探り求めて以前の死骸ト兩人藤太郎の
死骸を引上る此内藤棚より以前の掛物池の中へ落たるを
通り居る「半」さやのが持つて居る一軸こそ「丁」半次ぬかる

此内財布を落す段八止めを差し金を捜せ愛へ忍び廻わり
矢根五郎治リレ召捕れト段八迷るを捕手も追かけ這入
る此跡へ又平考へ乍来り財布に爪づき見て「又」エ、コリ
ヤ金ト口を押へるを道具替りにて元の又平の内へ廻るお
筆は戸棚へ書箱を入れ鏡をもち出して出すまいトする典鏡
鬼六は又平を隠して在ると母お駒福六の留るも捕はずお
筆を書箱の替りに連れて行くト引立て行く所へ又平歸り金
を出して典鏡へ渡すを請取今夜は釣鐘屋で大足遊びト鬼
六ト連立向ふへ這入る母は金と案じるお筆は戸棚を明け
書箱を出し今宵は目出度三味せん彈てト母の喜び皆々を
興へ遣り又平書を書て居る鳥部山の唄に成り「藤」又平と
の久々に逢ひ申すト又平胸にお筆を呼ひ書箱も来りみ
んな揃ふてト喜ぶ又平も筆に袖を引て指で書て勘當の位
をする「藤」コリヤ書箱との御口父へお筆とト書箱父の位
牌へ願ひ勘當を免せ又平夫婦喜んで居る所へ石山捨後の
手又平とのがお出に成り婆彌市とのト咄して歸られて
間もなく婆彌市とのが行方知れず五十兩トいふ金が亡な
る愛の内へ来はせぬかと出かけて来た庚申塚で婆彌市

どのが切られて居る盗んだ金を盗まれたか知らせに来た
ト出て行く跡にて皆々驚く藤太郎は様子を見留る又平と
突のけ向ふへ這入書箱もお筆の留るを振切り跡を進行上
手より福六出ておばアさんが咽をつら苦んでト又平驚
き寄るを「駒」嫁の貞節おのれの孝行通れと思ひしに不便
や弟に盗まをさせ途中におめて殺すとはト悔み乍落る
お筆は又平が母の刃を取て死なんとすれば私しも此福六
を殺して死す形見に獲る姿書なト跡へ残して「又」ア、
おの手水鉢がせ、石塔じやト手水鉢へ書を書き此石の
向ふへ振る夫婦驚き見る所へ五郎次段八を縛り繩取に引
せ又平に素心させよト引するも藤太郎書箱雷作出て
「藤」死ぬに及ばぬ「書」又平とのを勘當させしも雲谷が偽
筆との自状「藤」又一軸も隠し持柴屋町におる事迄知れた
る上は手配りなして敵討「藤」近松御坊の上人より授る彌
陀の尊影にて老母の回向ト掛物を出し老母へかざす死骸
より人魂出て又平の後ろへ消る是にて血を吐く「又」女房
仲藤太郎とコリヤ人並に口が利かれる「書」我子を守る
親の慈悲「筆」アノ手水鉢へ書た書が「又」後ろへ抜たは人

の一心雷荷書た書が抜たとは「皆々通れ名筆」淨「雲」櫻れば
世々にト三重に成り幕
○大詰柴屋町邸本望の場 正面中障子の襖形形の欄間を
かろし釣鐘屋二階の体揚女郎を合す「典鏡」愚老も運が
向いて来たか薬桶は取れまいと葛根湯を盛つた氣違ふが
直り五十兩手に入れば紫分女郎を買ひ酒を香れるト悦ぶ
所へ合方お浪来りト此頃五十兩お客に貸つた金と主
人へ返したればあなたのお所へ行れ升「典」馬鹿な奴もある
者ト廊下の外に伺ひ居たる「雲谷」身共は馬鹿ものお浪よ
くも訊した、お浪逃るを捕へケ様な間夫がある共知りま
身ぬけが仕たいと申すから渡して遣し五十兩訛られては勘
辨ならぬ主人の前へ一所に行金を返かそちらの間夫と思
ひ切り身共の妻に成るといふ起請を書か「浪」五十兩とい
ふお金を貰ひましたに違ひはないが夫婦約束したのはお
世事「雲」モウ機嫌がトお浪と打「浪」戀しい夫の見る前で
殺されるは本望「典」其金は愚老が返すト五十兩包を出す
を懐中し「雲」間夫とのシッポリおしげり成るト下手へ
這入る「典」其心根が知れた上はト奥にてお浪さんトト
呼ぶ「浪」エ、おれつたいト出行跡にて「典」嫌つたお浪が
女房に成るとは今年に醫者の豊年と見ゆるト廻る下座舖
に成り橋掛りより若い者案内して藤太郎雷作を連れ出て

女房に逢ふといひお辨を呼び「藤」高島家の浪人長谷部雲
谷はせり、平と名乗り入込し師匠を書し出奔をなし存ひ
し一軸取得されば敵を討とも其かひなし事なく一軸取返
す工風をト頼む「辨」足ぬ女の猿智恵もトウカ工風をト請
合ひ這入る「雷」書箱機と又平殿へお知せ申さん「藤」いか
に待し本望も「雷」目ざすは堅き石山のキヤツに粟津と
尋ね「藤」福田の長橋長共早る矢走せを堪忍び「雷」
松にかひある唐崎や「藤」遣れ堅田とつき留し「雷」有所を
三井のかねてより「藤」相圖は比良の雪をらで「雷」今宵を
つもる已雲谷「藤」コレト留る此道具お浪の部屋へ廻る判
人鬼六酒を吞で居る「お浪」鬼六さんの知せで長谷川さ
んといひ合せ「雲」金を取つたら本音を出し嫌な奴なら振
付て来ぬ様にするが能「鬼六」所が愛内の主のかみさんか
家業に似合ねへ馬鹿正直客を託て大金でも巻上た事を
升と返して遣れといひ升殿醫者だけふり出しついでに
ムイ升併し上ケ干しを喰つて典鏡はドンナ面を仕て居る
か「浪」顔が木魚に似て居るから蒲團の上へは似合て居升
「雲」イヤ已惚たやつだト愛へ機を明けて「典」といつもこ
いつも太い奴だ「浪」冥利の悪いお金だから訊して貰つた
「典」訊またとは太い奴ら街りが居るらみな来いト
ト是より女房若い者出て留めるき向ンでも金を出せト騒